

佐賀市 44 歴史探訪

くさばはいせんかのうまるこふん 草場佩川と花納丸古墳

天保11(1840)年1月19日に、久保泉町川久保に住む村人が、家をつくるために土手の石を外したところ、古墳の石室を発見しました。この中には、青銅製鏡1面、青銅製鈴(三環鈴)1個、碧玉製管玉12個などが納められていたので、これを掘り出したといいます。

私たちが、江戸時代の終わりごろに起きたこのことを詳しく知ることができるのは一体どうしてだと思いますか。それは、この顛末を記した2種類の文書が、古墳の出土遺物とともに、今でも残されているからなのです。

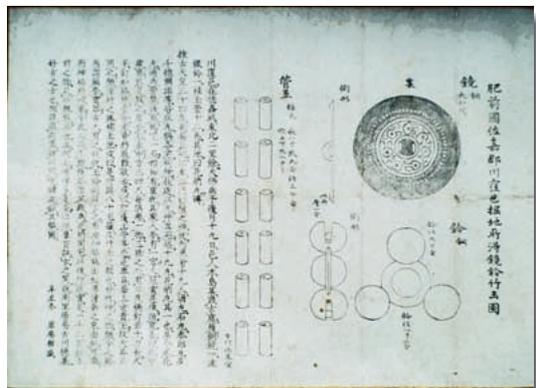
この2つの文書のうちの1つは、肥前の儒学者として有名な草場佩川(1787~1867)が書いた記録・考証に、歌人や画家として有名な古川松根(1813~1871)が描いた出土遺物の模写図を載せたもので、手書きではなく、木版によって印刷されています。載せられた図は遺物の特徴を的確にとらえたもので、その材質や寸法なども細かく記載されています。もう1つは墨で手書きされたもので、木版刷り記録の草稿と考えられるものです。

これらの記録に書かれた内容からは、博学多才と評され佐賀藩校弘道館の教授ともなった草場佩川が、今日でいう「考古学」の分野に対しても非常に大きな関心を寄せていたことがよく分かります。書かれている内容の中には、現在の研究成果と比較すれば、幾分違った解釈の部分もありますが、古墳に関する藩政期の記録としては県内唯一の貴重な資料であることには変わりありません。この文書をもって、彼を佐賀藩における「考古学」の先駆者と言っても過言ではないでしょう。

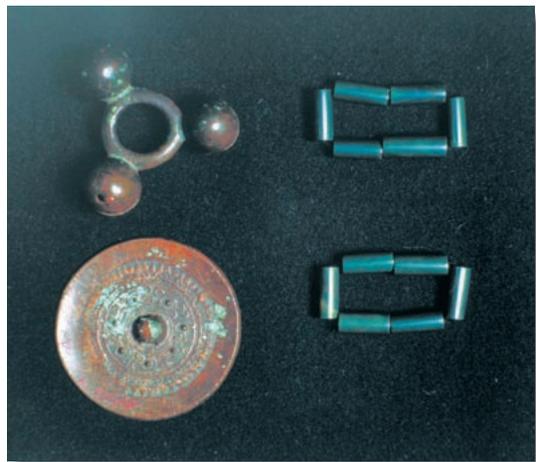
一口メモ

■古墳は現在「花納丸古墳」と呼ばれており、佐賀県史跡である関行丸古墳の西側にあったと考えられますが、古墳そのものはすでに消滅していて、どのような形状や構造だったのかは明らかではありません。

■ご紹介した記録と出土遺物は、佐賀県重要文化財に指定され、佐賀県立博物館に常設展示されています。



▲花納丸古墳の記録(木版印刷物)



▲花納丸古墳出土遺物

